

● シリーズ 私の見た日本 Vol.176

都市の中の連帯感

金 学宰 (キム ハフジェ)



韓国富川市出身。2013年慶熙(キョンヒ)大学土木建築工
学部建築学科卒業。2015年同大学一般大学院建築学科
卒業。同年建築都市空間研究所(auri)勤務。2015年9月
から現在まで早稲田大学建築学専攻古谷誠章研究室で博
士課程中。
都市構造についての研究を続けている。

出会いの機会

東京に初めて来たのは2010年2月だった。友達と一緒にバックパック旅行に来て、3泊4日の期間を過ごして韓国に帰国した。初めて東京を旅行したときにはソウルと東京は似ているところがたくさんあると思った。高い建物や車中心の都市構造、蜘蛛の巣のように絡まっている地下鉄などの交通手段がソウルと大きく異ならないように感じられた。駅から近くに並ぶ高層ビル、さまざまな食べ物、原宿と渋谷のような若者のまち、都市のなかにある歴史的なお寺や皇居が似ていると思った。そして、2015年9月に留学のために再び東京に来ることになったのだが、短い旅行のときは異なり、3年半の留学生活を通して東京とソウルではかなり異なる点があると思った。東京とソウルのさまざまな違いのなかで最も印象的な部分は都市の小規模ブロックで感じられる「出会いの機会」だった。

裏側の拠点

成田空港から銀座駅を通り、中目黒駅に向かう。中目黒駅から家までは歩いて10分かかるとは思うが、通常はバスやタクシーに乗らずに徒歩で移動する。それほど遠くはないので費用を節約するために歩くことは当然のことと言える。しかし、私にとって徒歩での移動は費用の問題ではなく、その道を楽しむためのものだ。ある日はメインの山手通り、ほかの日目は目黒川沿いに長く並んだ店や桜の木を見ながら、また別の日はさまざまな店が迷路のように絡み合う道を通って家に向かう。毎日異なる道の雰囲気を感じながら多様な経験を積むことができる。これが、私が感じた東京の最大の魅力的な部分である。この部分に魅力を感じるようになった理由は、以前、韓国で住んでいた大団地のアパート住宅での経験にある。

当時、9つの棟に718世帯が住むアパートで生活していた。韓国の新しい住宅計画は、全国的に大団地で構成されたアパートの開発である。これはソウルだけではなく、東京の郊外地域と世界中の大多数のメトロポリスで産業化の開発に基づいて現れる共通の住居形態でもある。経済的かつ合理的計画の下に土地を確保し、その場所に最大限の利益を得るための住宅計画は都心化状況において住宅難を解決することができる合理的な方法であった。現在では住宅難の解決のためのものより、中間層を象徴するものとしてアパートを所有する文化が多く見られるようになった。この大団地アパートの計画は、大規模な土地計画に沿って細やかな路地が消えることを意味する。ソウルで生活していたとき、駅から家まで10～15分くらいの距離である場合は、あえて徒歩ではなくバスや自動車などの交通手段を利用した。地下鉄と接続されているバスの乗り換えシステムは便利で、ときには東京よりも安い料金で利用できるタクシーに乗ることもあった。国土交通部の統計に基づくと韓国国民2.23人に対して車1台を保有しているため、ほとんどの人が生活のなかで自家用車を使用している。帰宅するとたいてい、地下駐車場や1階の外の駐車場に駐車し、エレベータに乗って家の玄関に向かう。休みの日に家の周りの外部施設を利用する場合にはアパートの入り口にある商店街や裏手にある遊び場が唯一のコミュニティの場になるのだが、そこから10～15分の距離にある大型マート(Eマート、ホームプラス)や団地の外に計画された手入れの行き届いた大公園があるため、団地内の施設を利用することはほとんどない。大団地のアパートでの生活は便利である一方、周囲とのコミュニケーションが極めて少ないのが実情である。

それに対して、東京の小規模ブロックのなかで生活した3年半は、利便性よりも絆を得ることができるものだった。毛細血管のよう

に広がっている裏通りを歩くと、そこにはさまざまな店や施設があり、なかでもコンビニは高速道路にあるサービスエリアのように日常の利便性を考慮した場所にあるようにみえる。コンビニは食べ物を購入するだけではなく、請求書の支払いやATMを介したお金の出し入れ、文書をコピーするといったことができるうえ、公演チケットや航空券を購入することも可能で、生活に欠かせない部分である。頻繁に利用するコンビニでは用事を済ませるだけではなく、店員と簡単な挨拶を交わすこともある。コンビニに限らず、定期的に行くクリーニング屋で喜んでくれたおばさんや、仕事帰りに立ち寄って一杯飲む居酒屋の存在はまちの帰属意識を形成させ、居住しているまちに絆を持たせる役割を担っている。「The Death and Life of Great American Cities」のJane Jacobsは、魅力的な都市の要素として4つのことを述べている。機能の多様性、小規模ブロックを通じた多数のコー



大団地のアパート計画(韓国)



大団地の入り口にある商業施設(韓国)



東京の裏側にある要素 ①コンビニ ②マーケット ③郵便局 ④居酒屋 ⑤公園 ⑥駐車場 ⑦学校 ⑧目黒銀座通り

ナー、新しい建物と古い建物の適切な調和、人間中心の通り、である。これらの都市を魅力的にする要素は、東京の裏側の小規模ブロックのなかにある多彩なプログラムから感じることができる。

裏側にある要素

東京の都市の裏側で見ることができるさまざまなプログラム(要素)とは何だろうか?基本的には住宅である。住宅は居住のための空間として最も個人的なものとして計画される。駅周辺には利便性を重視したマンションも多くあるが、安らかな生活のための居住目的の住宅は都市の裏側に計画される。そのため、都市の裏側に現れる要素は基本的に居住する人々の日常生活と密接に関連している。都心のなかの休憩所である公園、教育のための学校、子どもたちのための保育園と幼稚園、高齢者のためのホームケア、歴史的なお寺や故人の墓、利便性の総合体であるコンビニ、定期的に訪れる美容室やネイルショップ、仕事帰りに立ち寄る居酒屋、まちの玄関のような駐車場、朝においしい匂いを知らせるパン屋、季節の変化を知ることができるクリーニング屋、さまざまな食事ができる食堂などがそれにあたる。これらの施設は単に生活の機能だけを実行するのではなく、居住する人々との関わりを通じて絆を形成さ

せることができる。まちでのさまざまな出会いと多彩な経験は居住する地域に帰属意識を持たせる重要な要素であり、東京の裏側の通りにはこれらの絆を育むことができる機会にあふれている。

単純にプログラムだけで魅力的な都市を説明することはできないが、ニュータウンの大団地の計画で形成された巨大ブロックにあるヒューマンスケールの喪失は蓄積されたまちの特性を奪うものである。それに対して東京の都市の裏側には、昔から現在に至るまでのその都市ならではの時間の層が残っているため、10年、20年前の昔の姿を見ることが出来る。久しぶりに訪れた人々が思い出をよみがえらせることができる要素が裏側には多様に残っているのだ。それは建物の話に限ったことではなく、道路の幅と建物のスケールを介して持続された都市のイメージに対しても言えることだ。また、時間の経過に伴い、色あせた素材と高く育った木を通して、時間の痕跡が感じられ、そこから落ち着いた雰囲気を感じられる。これはまるで、奈良の東大寺をはじめとする日本の古い木構造の建物の維持と保守を実行する方法と同じであるように見える。材料の交換を介して形態を維持することで、着実に建物の固有の価値を保存する形式が都市にもさまざまな方法で出てきている。

裏側の拠点

東京の裏側の小規模ブロックは表側のように急速には変化せず、居住する人々の生活に合わせて柔軟にゆっくりと変化する。ゆっくりと変化する裏側には持続性がある。日々の何気ない会話や挨拶を交わすことでそこに住む人々との間に信頼関係を築くこともできる。進化生物学者のジャレド・ダイヤモンドは著書で、現代社会の持続する絆の価値が喪失していくことについて嘆いている。個人的な生活だけが重要視される社会において、日常生活のなかで関係性を築いていくことと、連帯の構築が必要である。東京の都市の裏側にはさまざまな要素があり、これらの要素は破片化された都市で拠点になり、蜘蛛の巣のように続くことで都市の多彩な生活がつくられていく。家から駅までの道、帰りにどこに行ったのか、誰と話をしたのか、どのような経験をしたのか。裏側に位置する数多くの魅力的な都市の拠点で絆が形成されることを期待する。

(翻訳/早稲田大学建築学専攻 古谷誠章研究室 修士2年 菅原 功太)